九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本近代文学における作品内作者 : 作品、作品内読者との関わり

安河内, 敬太

https://doi.org/10.15017/2348716

出版情報：Kyushu University, 2019, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式６－２）

氏　　名	安河内　敬太
論　文　名	日本近代文学における作品内作者―作品、作品内読者との関わり―
論文調査委員	主　査　　九州大学教授　　松本　常彦 副　査　　九州大学教授　　波潟　剛 副　査　　九州大学准教授　　西野　常夫 副　査　　元九州大学教授　　阿尾　安泰 副　査　　早稲田大学教授　　和田　敦彦

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、明治・大正・昭和前期に発表された具体的な作品事例に即し、日本近代小説の作品内作者（以下、〈作者〉と表記）の問題性や機能について、作品内容・語り等の表現・作品内読者（以下、〈読者〉と表記）および読者との関係性などを焦点化しつつ考察した総合的研究である。

序論では、平安文学から江戸文学に至る古典作品における〈作者〉の用例の確認、先行研究、関係する理論などについて整理・検討し、通史的な整理を行った上で、問題の多様性や多角性について指摘する。その上で、①〈作者〉、②〈作者〉と物語内容、③〈作者〉と言葉、④〈読者〉、⑤〈読者〉と物語内容、⑥〈読者〉と言葉という考察項目を設定している。

本論は二部から成り、第一部「〈作者〉と作品との関係」（第一～三章）は上記①～③を中心に、第二部「〈読者〉を経由した作品との関係」（第四～六章）は上記④～⑥を中心に検討する。

本論の第一章は、二葉亭「平凡」と芥川「羅生門」を対象に、両作に共通する〈作者〉による引用行為と〈作者〉の生成との関係性を分析する。その分析を通じて、「平凡」においては、二葉亭の名によって行われる引用がアイロニーの機能を担うこと、「羅生門」においては、〈作者〉による引用の再編集が作中の比喩と関連することなどを指摘し、作品読解の方向性を示す。

第二章は、太宰「道化の華」を対象に、〈作者〉による作品の虚構性の暴露が、創作主体としての責任の増大になるため、〈作者〉からの逃避が生じ、そこに付帯する〈作者〉の偏在と責任が、登場人物についての二様の描写の背景になっていると指摘する。具体的には、登場人物の個性を描きながらもネガティブになる場合、青年一般として解説的になる場合との二様の描写に潜む葛藤的な構造に潜む危険性と創造性が指摘されている。

第三章は、上司小剣「ごりがん」を対象に、主人公の老僧のあだ名である「ごりがん」という方言についての〈作者〉の言及を分析する。〈作者〉の言及は、たんなる語彙の説明や辞書的な説明ではなく、作品の展開や人物の独自の性格や作中の人間関係とも呼応すると指摘し、〈作者〉の言葉に対する態度と作品の解釈とを関連させて作品の特色を明らかにしている。

第四章は、宇野浩二「長い恋仲」を対象に、作品が、主人公の語り手の話を聞く〈作者〉、〈作者〉の話を聞く〈読者〉という二つの語りの場から成ることに注目する。前者の語りの場の分析では、語り手の「雑談」の「物語」化、語り手の語りへの介入によって生じるユーモアなどの効果といった〈作者〉の複数の機能が指摘される。後者の語りの場の分析では、「物語」の要請という〈読者〉の機能および〈作者〉と〈読者〉の相互作用的な関係を指摘する。以上から、作品の前半（喜劇的）と後半（悲劇的）における記述の差異の理由など、作品の基本的骨格を明らかにしている。

第五章は、高見順「故旧忘れ得べき」を対象に、登場人物と〈読者〉のそれぞれに対する〈作者〉

の対照的な態度や語り方を問題にする。物語の現在や進行にこだわり、社会一般的な価値観を求める〈読者〉に迎合する一方、登場人物に批判的な〈作者〉の態度は、転向小説という作品の性格やジャンルと不可分であると指摘する。その上で、批判的な語り口には偽装的な要素が含まれることを指摘し、その背景を分析する。また、転向小説に通底する転向体験自体の記述の欠如について、体験のメタファーを語る〈作者〉の語りという視点から作品を読解している。

第六章は、石川淳「佳人」を対象に、語る〈作者〉と語られる〈作者〉という自己の分裂構造および〈作者〉と〈読者〉との対立構造を検討する。唯一無二の独自な自己感覚を伝えるための分裂構造での〈作者〉の語りについて、煩雑な文章の性格や「臍」をめぐる堂々巡りの話という作品構造から分析する。その語りの宛先としての〈読者〉は、独自性とは逆の一般化を要請するとして、その点で作品の言葉は〈作者〉と〈読者〉の間で流動化すると指摘している。

結論では、上記の検討から、〈作者〉が登場する作品の性格が、〈作者〉、〈読者〉、物語内容（主に登場人物）、言葉の四者が取り結ぶ関係性と呼応することを再確認する。また〈作者〉の問題を文学史的な評価として捉え直している。さらに各章の俯瞰から派生する課題として、「包括する視点」の有無、否定される〈読者〉などの問題を指摘し、課題の解決には同時代性の評価などがあることを示唆している。

本論文は、個別の作品論というかたちで個々に分析されがちな〈作者〉の問題について、古典の事例を視野に入れつつ、明治から昭和前期までの代表的事例を横断的かつ実証的に検討する。そのことで、〈作者〉の生成、作品構造や作中人物との関係、語りの場の重層性がもたらす効果、〈読者〉との関係性など、〈作者〉の多様な機能を分析し、作品読解上の多くの問題があることを指摘する。本論文は、従来の個別具体的な作品研究に寄与するのみならず、〈作者〉についての総合的研究が、今後の日本近代文学研究の課題としても十分に意義あることを示している。

以上の内容および理由から、委員全員一致で、本論文が地球社会統合科学府の博士学位（学術）論文として十分な水準にあると判断した。